



<与謝野晶子生誕140年余>

昨年、歌人の与謝野晶子が生誕140年を迎えました。出生地の大阪府堺市を中心に記念行事が開かれ、TVでも柳原白蓮とともに特集になり放送されました。

明治に生まれた晶子ですが、自由奔放な思いを歌や詩を通して発表しました。

清水へ 祇園をよぎる 桜月夜 こよひ逢ふ人 みなうつくしき
その子二十 櫛にながるる 黒髪のおごりの春の うつくしきかな
やは肌の あつき血潮に ふれも見て さびしからずや 道を説く君

など、たくさんの歌を処女歌集『みだれ髪』に発表し、センセーショナルをまきおこしました。また戦地に赴く弟に「君死に給うことなかれ…」という詩を寄せたのはあまりに有名です。何ものにもとらわれず、夫鉄幹をはじめ家庭への愛や自分の思いを三十一文字に詠み、社会へ一石を投じました。時空を超え私たちの心に響いてきます。



<家事は女性が頑張ればいいのか？>

「おとう飯（はん）」ということばを聞いたことがありますか。内閣府が子育て世帯の男性が作る簡単な料理を指して使い、男性にも家事参加を促す事業です。女性の間からは「おとう飯は簡単でいいのに母親はきちんと作らなければいけないの」という意見が続出。日本の社会通念として、家事は女性との考えが未だに幅を利かしているようです。

専業主婦で、「夫は仕事で忙しいので、家事をして夫の活躍を支えるのが妻だ」との考えも多いようです。世間では主婦が家事を頑張らなければ家庭がうまくいかないとか、子どもに悪影響があるなどともいわれ、「きちんとやらねば」と考えて手を抜くことができない人も多くいます。

明治の頃は、女学生たちに家事全般が教えられました。ただし、彼女たちは割合裕福で、お手伝いさんのいるような家庭の子女だったのです。それが核家族の現代にも引き継がれ、電化製品のおかげで少しは楽になったはずが、「毎日違った献立」「毎日掃除」「育児」などお手伝いさんの役割を主婦が担うようになってきました。昔の制度や考え方により、女性の無償の家事労働を当たり前としてきたのが、男性の家事労働が少ない原因かもしれません。

世界を見れば、女性がしっかり家事を担うという意識は少なく、男女が協力して家事をし、外注可能なものは外注し、食に関しても、バランスを考え常に温かいものを出すといったこだわりはないようです。欧米では、一日のうち火を使うのは夜だけの家庭も多いようです。

女性も男性も同じように社会で活躍するには、家庭内のことをよく話し合い、お互いを尊重したうえで、家事分担をもっと考えるべき時なのではないでしょうか。

